

## 「水」の話

ことのほか暑い今年のお盆には、少し涼しい「お水」のお話をさせていただきます。「世界最初の哲学者」という名誉ある称号を冠せられたのは古代ギリシャのタレスですが、彼は「万物の根源は水である」と主張して歴史にその名をとどめました。それは乾いた砂の上に種をまいても芽を出さないのに、水をかけてやれば芽を吹くことから、水は生命の源と考えたのです。

現代科学の知識によれば、人間はお母さんのおなかの中、羊水という水の中で、魚から始まる太古からの進化の過程を再現しながら、やがて生まれてくる赤ちゃんの姿に育ちます。この時の記憶は心の奥深くに刻み付けられているらしく、キリスト教の一部では洗礼という儀式を行います。イエス・キリストがヨハネから洗礼を受けた時は、ヨルダン川に頭から浸けられたといわれます。それは、水中に入った時、古い自分が死に、水から出た時、新しい自分が生まれるという「死と再生」の意味があるからだといわれます。

インドでは、今も聖なる河ガンジスで罪とけがれを清める沐浴をすることが、ヒンズー教徒にとって大変重要な意味のある事ですが、さらに彼らは、人生の終わりに火葬された灰をガンジス河に流すことを理想としています。ガンジスは仏教のお経にも「恒河（ごうが）」と記され、無量の数を表す「恒河沙（ごうがしゃ）」（ガンジス河の砂の数）は頻繁に



出てまいります。

沐浴に関して、お経のなかに、極楽には宝石でできた方形の沐浴場、つまり、現在のプールのようなものをご想像いただきたいのですが、往生した行者が、そこに入ると足元から心地よい冷水が湧き出し、首のあたりまで浸した後、自然に水は引き、心地よい風が吹いて体を乾かしてくれると書かれています。そのおかげで、すがすがしい気持ちでまた修行に臨めるといふわけです。沐浴が大切なことは、実際にインダス文明の遺跡の発掘で、お経に書かれているような大きな沐浴場が発見されていることから明らかです。

さて、仏教では仏様にお供えする水を閼伽水（あかみず）といひます。

お盆に限らず、お墓参りをすると墓石の頭から水を注ぎますが、これは閼伽水をお供えしたのではなく、沐浴をしていただいたというべきだろうと思ひます。

お施餓鬼会でも御回向した塔婆を導師・脇導師・施主の順に水手向けをさせていたひております。この水手向けも沐浴のお供えをさせていたひていたひるのだと思ひます。お施餓鬼会にご参詣いたひだき、ご先祖様や志す霊位が、阿弥陀様の西方浄土・極楽でさらに修行を進めていたひだきために、直接施主であるご自分の手でも水手向けをお願いいたひたいと存じます。

